

よ
世にもふしぎな
エス シー ビー
SCPガチャ! ③

あ しんじつ ようじん
明かされる真実にご用心

あお
にかいどう青／作
とう きょう
東京モノノケ／絵



講談社 青い鳥文庫

もくじ



機嫌をそこねないようご注意ください

SCB・3671 めっちや怒ってるシリアルボックス

8



ずっといっしょにいてあげてください

SCB・174 腹話術入形

38





CONTENTS



3

凶暴につき関わらないことをおすすすめします

ES-SIBI
SCB・682 不死身の爬虫類

64



4

明かされる真実にご用心ください①

ES-SIBI
SCB・073 “カイン”

111



5

明かされる真実にご用心ください②

ES-SIBI
SCB・239 ちいさな魔女

138



そのきみ、すまないが、このあたりでおかしなガチャを見^みなかつたか？

SCP^{エスシーピー}ガチャというんだが。

そうか。見ていないならそれでいい。

ん？ SCP^{エスシーピー}ガチャとはなにかつて？

願^{ねが}いをかなえると同時^{どうじ}に、SCPオブジェクトをコピーする異常存在^{いじょうそんざい}だ。SCP財^{エスシーピーざい}

団^{だん}が確認^{かくにん}している奇妙^{きみょう}な物^{もの}や現象^{げんしょう}を、ぼくらはSCPオブジェクトと呼^よんでいる。

この世界^{せかい}には、常識^{じょうしき}では説明^{せつめい}できないふしぎなことがたくさんある。

そうした異常存在^{いじょうそんざい}を、

確保^{かくほ} (Secure^{セキユア})、

収容^{しゅうよう} (Contain^{コンテイン})、

保護^{ほご} (Protect^{プロテクト}) し、

一般^{いっぽうじん}人^{まも}を守る^{まも}ことが、SCP財団^{エスシーピーざいだん}の役目^{やくめ}だ。

エスシーピー
SCPガチャは、たしかに願いをかなえてはくれる。

しかし、真に希望どおりとはかぎらない。

なにより、ひとびとに危険をもたらし異常存在——オブジェクトまでも、ほぼ忠実にコピーしてしまうため、とても厄介だ。

オブジェクトは、その危険度によって大きく3つにクラス分けされている。

安全に収容できるものはSafe、収容できるが予測不能なものはEuclid、収容がむずかしく費用もかかるものはKeter。

もし、エスシーピーガチャを見かけても、ぜったいに近づかないでほしい。

ああ、そうだな。すまない。名乗るのを忘れていた。

多くの名前はクオリア。エスシーピー財団のエージェントだ。

もつとも、ここでよくと話したという記憶は消去させてもらうがね。

エス シー बी ざい だん

SCP財団とは



SCP財団は異常存在(オブジェクト)からひとびとを守るため、世界中でひみつの活動をしている。SCPはSpecial(特別) Containment(収容) Procedures(プロトコル)の頭文字であり、オブジェクトはこの「特別収容プロトコル」にしたがって、財団の施設でできせつに管理される。



エス シー बी ざい だん し めい

SCP財団の使命は3つ。

- ① オブジェクトをひとびとや組織に利用されないための確保(Secure)
- ② オブジェクトの影響や情報の拡散をふせぐための収容(Contain)
- ③ オブジェクトを安全に観察するための保護(Protect)



オブジェクトは収容のしやすさによってクラスがわけられる。安全に収容できる「Safe」、収容に多くの資源が必要となる「Euclid」、収容がきわめてむずかしい「Keter」である。





とう じょう じん ぶつ しよう かい 登場人物紹介



クオリア

エスシービー ざいだん

SCP財団のエージェント。

かみ 髪をピンクベージュに染め
ちゆうせい てき み め
ている。中性的な見た目や
こえ 声をしており、ねんれい さい
年齢は14歳
くらゐ みに見える。

バル

エスシービー ざいだん

SCP財団のエージェント。

ほう いつも棒つきのキャンディ
をくわえ、スケートボードを
かかえている。クオリアを
ライバル視している。

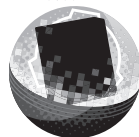


エス シー ビー

SCPガチャ

クオリアがさがしている異常存在。

かい えん 1回10円で、さまざまなオブジェクトの
だ きけん カプセルトイを出し、ひとびとを危険な
め そうぐう もの 目にあわせたりする。遭遇した者はガチャ
ゆうわく をまわしたいという誘惑にかられる。



1



ESシービー
SCB

・3671 めっちゃ怒ってるシリアルボックス

機嫌をそこねないようご注意ください

「うへえ、また焼き魚だし。」

小学5年生の佐々木麻朝は、ダイニングテーブルにならぶメニューを見て、不満を口にした。

焼き魚にたまご焼きにおみそ汁。五穀米にトマトと海藻のサラダ。

「なんだ、マーサ。魚の油は不飽和脂肪酸をふくんでいて、体にいいんだぞ。」

先にテーブルについていた父が、器用に魚の身をほぐして口に入れる。

出たよ不飽和脂肪酸、と、マーサは鼻の頭にしわをよせた。

長らく肥満ぎみで、健康診断のたびに注意されていた父だけれど、ずっと平気平気

と無視してきた。

それが2年前に大きく体調をくずしたことで、健康に気をつかうようになり、もと

もと美容びように関心かんしんのあった母ははと意気投合いきとうごうしたのだ。

以来いらい、佐々木家ささきけのテーブルにはヘルシーなメニューがならぶようになった。

野菜多め。糖質とうしつ少なめ。発酵食品はつこうしょくひん多め。

揚げ物あげものNG。ジュースもお菓子かしもNG。

朝食ちようしよくは父ちちが魚さかなを焼く。この2年ねんほど、ほぼ毎日まいにちだ。

おかげで父ちちはかなりの減量げんりように成功せいこうした。血液けつえきサラサラ、快眠かいみん・快便かいべんだという。

「わかるけどー、たまにはシリアルとか食たべたいんだよー。」

オート麦むぎにトウモロコシ、甘くコーティングされたアーモンドやくるみ、ドライフ

ルーツがごろごろ入はいっている、CMシーエムでやっているようなやつだ。

「もんく言いってないで、さつさと食たべちゃいなさい。」

先に食たべおえた母ははが、メイクのとちゅうで口くちをはさんでくる。

「魚さかなはお肌はだにもいいんだから。」

マーサはほおをふくらませつつ、「いただきます!」と食事しょくじを口くちに運はこんだ。



学校がっこうでの一日いちにちがおわり、友人ゆうじんたちと校門こうもんを出でる。

夏なつの日差ひざしとともに、頭上ずじょうから大音量だいおんりょうのセミの鳴き声なごえがふってくる。

わいわいしゃべりながら歩あるき、やがて横断歩道おうだんほどうにさしかかった。

「マーサちゃん、ばいばい。」

「またねー。」

そこからひとりになり、青信号あおしんごうで横断歩道おうだんほどうをわたる。

そうして自宅じたくマンションの方角ほうかくへ歩あるいていくと、ふと、みょうなものを発見はっけんした。

「ガチャだ。なんでこんな道端みちばたに？」

まわりにお店みせはなく、少し前すこしまえまでキレイに咲さいていたアジサイがしおれてくたくたになつてゐる以外いがい、なにもなかった。

「不法投棄ふほうとうきされちゃったとか？」

実際じっさい、かなり古いタイプふるのガチャだ。

近づいてのぞきこむと、ガチャにはこんな言葉がならんでいた。

願いがかなう!? ESCBガチャの世界へようこそ!!

世にもふしぎなこと——異常存在を確保（Secure）、收容（Contain）、保護（Protect）し、ひとびとを守ることが、ESCB財団の役目なんだ。

たった10円で、きみも願いをかなえちゃおう！
だけど危険なオブジェクトが出てきたときは……。

*当運営は、いつさいの責任をもちません。

「願いがかなう? ……変なの。」

ユニークなフィギュアの見本写真ものっていた。



カラフルな恐竜きょうりゆうのフィギュアには『SCP-173-JP』、炎ほのおにつつまれたオラ
ンウータンには『SCP-2984』と番号ばんごうがふられている。

ガチャをまわしたところで、願ねがいなんかかなうわけがない。

そうは思うおものだけれど、それをながめているうちに、ふしぎな気持きもちちになった。
か、チャをまわさなくてはいいけないような……。

「まあ、10円えんだしね。てか、10円えんって、めっちゃデフレじゃん。」

デフレとは、物の値段ねだんがさがる現象げんしょうのことだ。

マースは、いざというときのための小銭こぜに入れをランドセルから出して、10円玉えんだまを用
意いした。

それから、サツとまわりをたしかめる。学校がっこう帰りにガチャなんかやっているところ
を見られたら、あとで怒おこられると思おもったからだ。

けれど、幸運こううんにも通行人つうこうにんはいなかった。

よしと思おもって、10円玉えんだまを投入口とうにゅうぐちに入れる。



願ねがいごとなら決きまっていた。

「たまには朝あさごはんにシリアルが食たべたい！」

ゴロン、と出でてきたカプセルをあけて、中なか身を確かく認にんする。

「わっ。すごくない!？」

それは、まさしくシリアルの箱はこをデザインしたフィギュアだった。

店頭てんとうにならんでいるのは、ジップタイプの袋ふろ入りのものも多いけれど、外国がいこくの映画えいがなどではこういう箱はこ入りのシリアルをよく見みかける。

付属ふぞくの説明書せつめいしょには、『SCP—3671』めっちゃ怒おこってるシリアルボックス』

『機嫌きげんをそこねないようご注意ちゅういください。』と書かいてあった。

「めっちゃ怒おこってるってなんだろ？ てか、これ持もってたら、朝あさごはんのメニューが変かわるってこと？」

くわしい説明せつめいがないのでよくわからない。

「まあ、でも、これはこれでかわいいし、机つくえにかざって——。」



そこで、おかしなことに気づいた。

いつのまにか、ガチャが消えていたのだ。

「どういうこと？」

勝手に動くはずはないし、だれかが運んだとも思えないのだけれど……。

「なぞだ。」

ふしぎに思いつつも、マーサはカプセル一式をランドセルに押しこんで帰宅した。

○ ○

「あ、おはよ、マーサ。ママ、もう行くね。」

朝、目を覚まして部屋を出ると、母がばたばたとあわただしげにしていた。

「おはよう、ママ。早いね。」

「電車の遅延が出てるの。パパも出張で先に出たから。戸締まりしてね。」



「うん、わかった。」

「あと、あのシリアル、おこづかいで買ったの？」

バッグを持って玄関にむかう母が、よくわからないことを言う。

「シリアルって？」

「まあ、たまには食べたいよね。がまんさせちゃってごめんね。ママたちも、ちよつと神経質だったかもってパパと反省したの。」

マーサはますます首をかしげる。

本当に、母がなにを言っているのかわからなかった。

「えっと、それってどういう……。」

「あ。もう行かなくちゃ。ごめんね。いつてきまーす！」

母は腕時計を確認すると、パンプスをはき、急いで家を出ていった。

残されたマーサはひとまずトイレに行き、それからダイニングへむかった。

「あ！」



テーブルの上に、『ストロベリースクエアズ』と書かれたシリアルはこの箱おが置いてあるのが見えて、マーサは飛びついた。

「ママが言つてたやつで、これか。」

ポップでアメリカンな箱で、イチゴ味のようだ。

「え、でも、うちが買ったんじゃないけどな。」

母の言い方からすると、父が買ったわけでもないようだ。

家族のだれにも心当たりがないということになる。

いや、もしかしたら――。

「ガチャの願いがかなったってこと？」

マーサは箱を置いて、いったん自分の部屋にもどった。

「ない。フィギュアがなくなってる……。」

きのう、ランドセルのなかの教科書とノートを入れ替えるとき、フィギュアを出して机にかざっておいたのだけど、それがどこにも見当たらなかった。



本当に願いがかなったのではないだろうか。きつと、本物が出現するのとひきかえに、フィギュアのほうはなくなってしまったのだ。

「うん、きつとそうだ！　すごい！　って、だったら、もつと豪華なお願いすればよかった……。」

シリアルなんて、それこそおこづかいで買える。

それより、100万円ほしいとかにしておけばよかった。

「……ま、いまさらだけど。」

マーサはダイニングにもどって、箱をあけた。

なかに入っているプラスチック製の袋も破いて、器に中身を出す。

サイコロ状のシリアルがコロコロと転がり、イチゴらしいさわやかな香りがした。

冷蔵庫から持ってきた牛乳をかけ、さつそくスプーンでひと口。

「うまい。」

サクサク食感と人工甘味料の背徳的な甘さに、マーサのほおはゆるんだ。



身支度をととのえたマーサは、ふだんより少し早めに家を出た。

きのう学校帰りに見かけたガチャをさがそうと思つたからだ。

今度はもつと大きな願いごとをしようと、10円玉もいっぱい持つてきた。

具体的には31枚だ。家にあるだけかき集めてきた。

おかげでちよつとランドセルが重い。

けれど、どんなにさがしても、きのうのガチャを見つけることはできなかった。

朝から日差しが強く、汗だくになつただけだ。

「なんだよー、がっかり……。」

マーサには310円ぶんの重みだけが残された。

学校の友人には、ガチャのことは話さなかった。

話したところで、どうせ信じてもらえないにちがいない。

かなった願^{ねが}いも、たいしたものではなかったし、自分^{じぶん}だけのひみつにしておこうと
マーサは思^{おも}った。

○ ○

「おはよう、ママ。」

自室^{じしつ}を出ると、母^{はは}が洗面所^{せんめんじょ}の前^{まえ}でピアスをつけていた。

「マーサ、おはよ。ごめん、ママ、きょうも早く^{はや}出^でないといけないの。」

「オッケー。気^きをつけてね。」

「うん、いつてきまーす。」

母^{はは}を見送^{みおく}り、マーサはダイニングへむかった。

テーブルの上^{うえ}には、きょうもシリアル^{シリアル}の箱^{はこ}が置^おいてある。

さっそく器^{うつわ}に盛^もろうとして、ふしぎなことに気^きづいた。



きのうとパッケージデザインが変わり、『チョコチャンス』と書いてあるのだ。
というか、そもそも箱があいていない。新品だった。

「ママが新しいの買ってきてくれたのかな？ てか、食べかけのやつは？」
食品棚や冷蔵庫のなかをさがしても、どこにも見つけれなかった。

「あ、そっか。ママが食べたんだな。なんだよー、自分も好きなんじゃん。」
食べきってしまったので、きのうのうちに代わりのものを購入してきたにちがいない。

マーサは箱のなかから出した袋を破いて、中身を器にたっぷり盛った。
牛乳をかけると、コーティングのチョコが溶け、マールもようを描く。

「いただきます。うまつ。」

ミルクチョコの甘みにマーサは大満足だった。

いつものように友人たちと学校を出て、信号のところからひとりになる。

もう一度、ガチャをさがしてみたけれど、やはりどこにも見当たらなかった。

マンションに帰りついたマーサは、エアコンを入れ、顔を洗う。

ふー、とひと息つき、冷蔵庫から出したペットボトルの麦茶をグラスにうつす。
が、なみなみとそそぎすぎて、麦茶があふれてしまった。

「あつ。」

ダイニングテーブルの上に麦茶が広がっていく。

「やばやば。ふきん、ふきん。」

マーサは台拭きを手にして、テーブルを拭いた。

テーブルの上に出しっぱなしにしていたシリアルはこの箱もふきんで拭いておく。

底がふやけてしまったけれど、これくらい、どうということもないだろう。

「置いてけば乾くよね。」

マーサはなから袋を出して、チョココーティングされたシリアルをぽりぽりとかじり、麦茶をごくごくのんだ。



シンクで洗い物^{あらもの}をしていた母^{はは}に「おはよう。」と声^{こえ}をかけてから、マーサは冷蔵庫^{れいぞうこ}から牛乳^{ぎゅうにゅう}をとり出^だした。

器^{うつわ}を用意^{ようい}し、シリアルに手^てをのばす。と、箱^{はこ}がずっと重^{おも}くて、びっくりした。

「うわ。」

いや、重^{おも}たいだけではない。

「え、ちよ、なにこれ。」

箱^{はこ}のデザインがおかしいのだ。

おとといは、『ストロベリースクエアズ』、きのうは『チョコチャunks』と書^かかれていたところに、『てめえふざけるなよ!! なにぬらしてやがるんだ! ぶん殴^{なぐ}られてるのか!』と書^かかれているのだ。



てめえぶさけるなよ!!
なにぬらしてやがるんだ!
ぶん殴られてえのか!!



「ねえ、ママ。これなに？」

「なにつてなにが？」

手をぬぐつてから、母がマーサの持つ箱をのぞきこむ。そうして顔をしかめた。

「また、新しいの買ってきたの？」

「え、ちがうよ。うちじゃない。ママが買ってきたんじゃないの？」

「ママが買うわけじゃないじゃない、そんなおかしなもの。」

どういうことだろう？ さつぱりわからなかった。

マーサは慎重に未開封の箱をあけてみた。なかにはふつうに袋が入っている。

ただ、シリアルではありえない重さだった。そちらも開封してみる。

マーサは自分の目を疑った。袋のなかには、大量のクギが入っていた。

気味がわるい。

マーサは箱を燃えるゴミへ、クギは燃えないゴミに分別して出した。

なんだか食欲がなくなってしまうて、その朝は牛乳をのんだだけで家を出た。



翌朝のことだ。

前日なんとなく不調だったせいで、うまく寝つけなかったマーサが、よたよたダイニングに入っていくと、テーブルの上にシリアルの箱が置いてあった。

え？　と思い、瞬時に目が覚めた。

そつと箱を確認する——と。

『てめえ、なに捨ててやがんだ！　ゆるすねえぞ！　この落とし前はすちんとつけさせるから覚悟しろよ！』

そう書いてあった。

イヤな汗がだらだら流れてくる。

「マ、ママ……これ、どうしたの？」

「ママが起きたときにはなかったはずなんだけど、ついさつき見たら、そこにあったんだよね。それ、なんのジョークなの？」



父^{ちち}は出張^{しゅつちやう}中で、この家^{いえ}にはマーサと母^{はは}しかない。

だから、シリアル^{はは}の箱^{はこ}をテール^おブルに置^おけるのは、どちらかだ。

だけど、母^{はは}が用意^{ようい}したとは思^{おも}えない。もちろん、マーサ自身^{じしん}でもない。

「これは……。そ、そう、ジョークだから。図工^{ずこう}でつくったんだ！ よ、よくできてるでしょ？」

「ママ、そういう言葉^{ことば}づかいは感心^{かんしん}しないな。」

「あ、うん……。」

「で、どうするの？」

「え？」

「朝^{あさ}ごはん。」

「ああ、えつと、けさは……お魚^{さかな}、食^たべたいかな。」

ずっしり重^{おも}たい箱^{はこ}をかかえて、マーサは答^{こた}えた。

この箱^{はこ}のなかには、なにが入^{はい}っているのだろう？

シリアルだとは思えない。

またクギだろうか？

それとも、もつとべつの、危険なものが入っていたりするのだろうか？

いったい、なにが起きているんだろう……。

いまさらだけど、ガチャでフィギュアをひきあててから現れるようになったシリアルの箱は、どう考えてもふつうではなかった。

そう、ガチャをまわしてから、おかしくなったのだ。

最初は願いがかなったと浮かれていたけど……。

そういえば、フィギュアに付属していた説明書には、こう書いてなかったか？
機嫌をそこねないようご注意ください。

「うちが、箱の機嫌をそこねたってこと？」

箱をぬらしたり、ゴミに出したりしたせいで、すごく怒っている。

つまり、このシリアルはこの箱には感情があるということだ。



「ど、どうしよう……。」

また捨てたりしたら、もつと状況がわるくなるかもしれない。

だけど、このままにしておくわけにもいかなかった。

箱は一定の時間がたつと未開封の状態になるようだ。

そして、いったん機嫌をそこねると攻撃的な言葉をむけてくる。

こんなこと、だれにも相談できない。

呪いの人形ならぬ、呪いのシリアルボックスなんて、だれが信じてくれるだろう。

自分が相談される立場だったら、信じない。

マーサは開封せず、箱ごと紙袋に入れて、ガムテープでぐるぐるまきにした。

そうして、クローゼットに押しこみ、ひとまず登校した。

けれど、学校にいるあいだも気が気ではなかった。

あのシリアルは激怒している。

マーサに報復しようと考えているにちがいない……。



放課後、友人たちからお菓子づくりに誘われたけれど、マーサは断って、急いで帰宅した。

すぐに自分の部屋に行つて、クローゼットをあける。紙袋ごと消えていたらどうしようと不安だったけど、朝のままそこにあったので、ほつとした。

だけど、やはり、このままではいられない。

「……いつそ、燃やしちゃうとか？」

灰にしてしまえば、手出しでなくなるのではないだろうか？

「うん、そうだ。それしかない。」

紙袋とライター、アルミのバケツを持つて、近所の川へむかうことにした（注・ライターは大人といつしよに使用してください）。

ひと目につかない橋の下へおりていつて、周囲に燃えやすいものがないか、ちゃんと確認する。火事になったりしたら、それも大事件だ。

「よし、だいじょうぶ。」

マーサはバケツのなかに紙袋かみぶくろを押しこんだ。

それから、ライターを右手みぎてでにぎる。あとは火ひをつけるだけ——なのだけれど。

マーサはなかなか実行じっこうにうつすことができなかった。

手がふるえ、冷たい汗あせが背中せなかを伝つたう。

もし報復ほうふくされたらどうしよう？

この箱はこは、あきらかにふつうではない。だったら、たとえ燃もやしたところで、また

もどつてきて、マーサになにかしようとするのではないだろうか？

それこそ、呪いのろの人形にんぎょうのように……。

「そこまで不安ふあんがる必要ひつようはない。」

とつぜん声こえがして、マーサはふりかえった。

ピンクベージュの髪色かみいろをした、中学生ちゅうがくせいくらいの人物じんぶつが立たっている。

白いブレザーを着きていて、男子だんしにも女子じょしにも見みえた。

「え、あの……。」

「ぼくの名前はクオリア。SCP財団のエージェントだ。」

「えすしーぴー……あ、ガチャにも書いてあった。」

「SCP財団は、常識で説明できない物や現象を確保（Secure）、収容（Contain）、保護（Protect）することで、一般人を守っている組織だ。きみは、SCPガチャと出合ったな？」

問われて、マースはうなずいた。

「願いを、かなえてくれるって……。」

「あれは、そのような言葉でひとの心をまどわし、ガチャをまわさせることで、財団が確認している異常存在をコピーするんだ。しかし、本当に希望したとおりに願いがかなうことは少なく、ほとんどの場合は、ひどいことが起きる。なにを願った？」

「う、うち、すごくどうでもいいお願いをして、その、たまには朝ごはんにシリアルが食べたいって。そしたら、変なシリアルの箱が……。」



「なるほど。確認かくにんさせてもらおう。」

クオリアはバケツに押しこんだ紙袋かみぶくろをとりあげると、ガムテープをはがして、中身なかみをたしかめた。

「やはり、『SCP-3671』だったか。また、ずいぶんと怒おこらせたようだな。」

箱はこに書かかれていた文章ぶんしょうを見て、クオリアはまゆをあげた。

「う、うち、箱はこをぬらしちゃって。それからゴミ箱ぼこに捨てすちゃったり……。」

「SCP-3671は、『めっちゃ怒おこってるシリアルボックス』との通称つうしょうもあるくらいで、怒いかりの沸点ふつてんが低いひくんだ。しかし、そこまで不安ふあんがる必要ひつようはない。」

「で、でも、なかにクギが入はいってたりして……。」

「SCP-3671は、毎朝まいあさ6時半じはんになると、新品しんぴんになる異常存在いじょうそんざいだ。通常つうじょうであれば、なかには一般的なシリアルが現あらわれる。ただ、一度怒いちどおこらせると、パッケージの文言もんごんを攻撃こうげき的に変化へんかさせ、威嚇いかく的な内容物ないようぶつを出現しゅつげんさせる。とはいえ——それだけだ。」

「そ、それだけ？」





「毒物^{どくぶつ}などを生成^{せいせい}することもあるので、開封^{かいふう}すると命^{いのち}に危険^{きけん}がおよぶこともあるのだが、あけなければいいだけの話^{はなし}だ。直接^{ちよくせつ}きみに危害^{きがい}をくわえるようなことはない。」
言^いって、クオリアはシリアル^{シリアル}の箱^{はこ}を持^もちあげると、勢^{いきどろ}いよく地面^{じめん}にたたきつけた。
見^みるまに箱^{はこ}はちぎんでいき、やがて手^てのひらにおさまるフィギュア^{フィギュア}となった。

「こいつは回収^{かいしゅう}させてもらう。」

いまさら、そんなものほしくないので、マーサはうなずいた。

「え、これでおしまい？」

「そうだ。」

「も、もうおかしいなことは起^おこらない？」

「保証^{ほしやう}する。」

信^{しん}じていいのだろうか？

いや、このひとはマーサ^{マーサ}の身^みに起^おきていることについてくわしかった。信^{しん}じていいはずだ。そう思^{おも}い、マーサは胸^{むね}をなでおろす。

そもそも、あけなければ危険はなかったという話^{はなし}だけど、それでも怖い^{こわ}思い^{おも}をするのはごめんだ。

「ありがとうございます。本当に。」

「これがぼくの仕事^{しごと}だ。それから、今回のこと^{こんかい}はすべて忘れて^{わす}てらう。」

「え？」

クオリアが右手^{みぎて}をのばしてきた。冷たい手^{つめ}のひらがひたいに押し^おつけられる。

「きみは、ぼくとは出^で会^あわなかった。SCP財団^{エスシーピーダイン}も、ガチャのこと——。」

○ ○

「おはよう、マーサ。どうしたんだ？ こんな朝^{あさ}から。」

早起^{はやお}きしたマーサがキッチンに立^たっていると、ゆうべ遅^{おそ}くに出張^{しゅつちやう}から帰^{かえ}った父^{ちち}がう

しろから声^{こえ}をかけてきた。



「いや、パパがつくると、お魚、グリルで塩焼きにしちゃうから、たまにはメニュー変えたいと思って。」

サケの切り身をムニエルにしていたところだ。バターの香りが食欲を誘う。

「おお。すごいじゃないか。」

「まあね。パパ、お皿出してよ。」

「よろこんで。」

「あら、いいにおい。」

そこに母も起きてきて、3人で朝食を準備する。

いつも不満ばかり言ってきたけど、どうせならこうして自分から行動してしまえばよかったのだ。小学生の自分にはできることとできないことがあるけれど、これくらいならむずかしくない。それに、けっこう楽しいかもしれない。

ネットで少し調べてみたら、シリアルは自作できると書いてあった。

よし、今度、挑戦してみよう。

SCPガチャ図鑑

めっちゃ怒ってるシリアルボックス



オブジェクト
クラス
Safe
セーフ

アイテム番号
SCP-3671

とくべつしゆよう スペシャル コンテインメント プロシージャーズ
特別收容プロトコル (Special Containment Procedures)

サイト-19、保管棟 K-14 の中セキュリティ保管ロッカーにし
まわれている。その外見と中身は、毎日撮影および記録される。

説明

一般的なブランドのシリアルボックス。毎日、現地時刻の
午前6時30分に、その内部に新たな物体入りプラスチック袋
を出現させる。知性があり、怒らせると怖い。



2



ESシービー
SCB・174 腹話術入形

ずっといつしよにいてあげてください

小学6年生の萩原大地には、ふたつ年上の兄がいる。

物心ついたときには、両親が離婚して母子家庭だったので、家をあげがちな母に代

わって、兄——天也がダイチのめんどろを見てくれた。

やさしい兄だ。ダイチがなにかやらかしても、いつも少し困ったような顔をするだ

けでゆるしてくれた。

ダイチにだけでなく、テンヤはだれに対しても親切で、学校でもみんなに好かれて

いるようだった。

中学では生徒会の副会長をつとめながら、バスケット部に所属している。運動神経がよ

くて、成績も優秀なテンヤのことを、ダイチは心から尊敬していた。

そんな兄が、最近、腹話術をはじめた。



腹話術ふくわじゆつというのは、くちびるを動かさずに声こえを出し、自分以外じぶんがいのものがしゃべっているように思おもわせる技術ぎじゆつのことだ。

木製もくせいの古めかしい腹話術人形ふくわじゆつにんぎようを手てに、会話かいわの練習れんしゆをしているところを、ふたりの相部屋べややリビングで何度なんども見みかけた。

「すっげ！ 兄ちゃんにい、うまいね。」

兄あにはまったく口くちを動かさずに人形にんぎようの声こえを発はつしていた。

『テンやは努力家どりよくかだからね！』

人形にんぎようが発はつするとき、兄あには小さな子こどものような甲高い声かんだかこえでしゃべった。

「ほんと、ぜんぜん口動くちうごいてないし。」

ダイチもマネしてみたけれど、どうしても少しはくちびるがひらいてしまう。

「てか、その人形にんぎようどこで買ったの？ けっこう古ふるそうだけど。あ、もらったとか？」

『ESCバガチャをまわして、手てに入いれたんだ！』

「えすしーピーガチャ？」



聞きなれない単語に、ダイチは首をかしげた。

『お願いをかなえてくれるガチャだよ。』

「なにそれ。腹話術人形がほしいってお願いしたわけ？」

これまでテンヤが人形に興味をもったことなんてなかった。少なくとも、そう感じたことはない。

なにかきつかけでもあったのだろうか？

兄は人形の首を横にふり、こう答えた。

『ううん。本音を話せる友だちがほしい、って願ったんだ。』

正直なところ、その人形はダイチからすると少し不気味だった。

衣装はボロボロだし、無表情で、かわいげが感じられない。

にもかかわらず、兄はその人形をかたときも放そうとしなかった。

食事のときもひざにのせ、風呂に入るときも浴室へ連れていき、ベッドでは抱くよ

うにして眠^{ねむ}った。

木^{もく}製^{せい}の人^{にん}形^{ぎよう}なんて抱^だいても寝^ね心^ご地^ちがわるいだけではないかと言^いつたら、兄^{あに}は『離^{はな}れ
たくないんだ。』と人^{にん}形^{ぎよう}の声^{こえ}で答^{こた}えた。

『ガチャのカプセルに入^{はい}っていた説^{せつ}明^{めい}書^{しよ}にも、「ずっといつしよにいてあげてくだ
さい。」って書^かいてあったしね。』

だれかから習^{なら}ったわけでもないだろうに、兄^{あに}の腹^{ふく}話^わ術^{じゆつ}は完^{かん}璧^{ぺき}だつた。
やつぱり兄^{あに}はなんでもできるんだ、すごい、とダイチは感^{かん}心^{しん}した。

あるとき、ダイチが学^が校^{こう}から帰^き宅^{たく}すると、めずらしく兄^{あに}が先^{さき}に帰^{かえ}つてきていた。

「ただいま。」

ランドセルを置^おきながら言^いうと、兄^{あに}は2^{だん}段^{だん}ベッ^どの下^{した}の段^{だん}に腰^{こし}かけ、人^{にん}形^{ぎよう}をあやつ
りながら返^{へん}事^じをした。

『おかえり、ダイチくん。』

「兄ちゃん、ほんと、それ好きだね。ずっと持つてる。」

『ぼくたちは友だちだからね。』

相変わらず、兄はくちびるを少しも動かさずに人形に声をあてている。

「ふーん。そういや、その人形の名前聞いたことなかったけど、なんていうの？」

『ぼくには名前がないんだ。だから、好きに呼んでくれていいよ。』

「名前ないとか不便じゃない？ 兄ちゃんはなんて呼んでるの？」

『テンヤはぼくを、親友くんって呼ぶよ。』

兄ちゃんに聞いているのにな、とダイチは少し不快な気持ちになった。

最近、兄は人形を通してしか会話してくれない気がする。

うまく説明できないけれど、それがなんだかイヤだった。

「親友くんね。あらためまして、おれはテンヤの弟のダイチです。」

ダイチは人形の顔を見ながら言った。

『よろしくね、ダイチくん。』



「親友くんは兄ちゃんとは本音で話せる仲なんですよ？ だったら、兄ちゃんのひみつを教えてよ。」

言つて、兄を見る。

テンヤはダイチではなくて、人形のほうを見ていた。

『残念だけど、それはできないよ。テンヤを裏切りたくないからね。』

人形は首を横にふった。もちろん、背中に手を入れた兄が操作しているわけだ。

『でも、その代わり、ぼくの話をするね。』

「親友くんのこと？ いいね。聞かせてよ。」

『ぼくのうちは、お父さんがいないんだ。』

「うちもそう。」

『3人家族で、弟がひとりいるよ。』

「うちも3人家族。」

『元気で思いやりのある、いい弟なんだ。』



「まるでおれみたい。」と、ダイチは冗談めかして笑う。

『ぼくはお兄ちゃんだから、すっかりしないといけない。お兄ちゃんだから、いろいろがまんしてきた。わがままを言ったことはないよ。弟みたいに。』

ダイチは兄を見やる。

兄はやっぱり人形しか見ていなかった。

『ずっと弟がうらやましかった。自由で。』

ダイチはなんと言っているのかわからなくて、ただ兄を見つめる。

兄が話していることは、自分たち家族のことだった。

兄がこんなふうにも思っていたなんて知らなかった。

『このつらさを、だれにも話したことはなかった。言えるわけない。ぼくは優秀で、

かっこいい、完璧な、お兄ちゃんじゃないといけない。』

孤独だった、と人形は言った。

『だから、テンヤと出会えてぼくは幸運だ。ぼくたちは似た者どうしなんだ。』



兄あにがずっと心こころにためていたことを話はなしてくれた。

人形にんぎょうを通してだけど、本音ほんねが聞きけて、よかつたのかもしれない。

兄あにが優秀ゆうしゅうすぎて、ダイチも母ははも、みんな、たよつてばかりだつた。

でも、テンヤだつてまだ、中學生ちゅうがくせいだ。

弱よわいところがあつて当あたり前まえじゃないか。

もつと自分じぶんもしつかりしないといけないと、ダイチは目めが覚さめる思おもひだつた。

これからは、きつといいほうに進すすんでいくにちがいない。

そう期待きたいしたのだけれど――。

翌日よくじつも、学校がっこうから帰かえつてくると兄あにが先さきに家いえにいて、部屋へやで人形にんぎょうと会話かいわをしていた。

「兄にいちゃん、ただいま。きょうも早はやいね。」

『聞きいてよ、ダイチくん。ひどいんだ。』

「……なにが？」

『きょう、テンヤは学校にぼくを連れていつてくれたんだ。』

「え？ その人形、学校に持ってたの？」

『そしたら先生が、ぼくとテンヤを離れ離れにしようとしたんだ！』

「いや、それはそうでしょ。」

学校に腹話術人形なんて持つていつても、とりあげられるに決まっている。

そんなこともわからない兄ではないはずなのに……。

ふいにそれまで人形を見ていた兄が、こちらを見た。

人形と兄、ふたつの視線がダイチにむけられる。

「……に、ちゃん？」

テンヤは返事をしてくれず、そつと人形に顔をよせた。ダイチには聞こえない声でぼそぼそと人形とだけ話す。まるで、何事かを相談するように……。

その夜のこ^{よる}とだつた。

一度は眠^いつたダイチだつたけれど、深夜^{しんや}にふつと目^めが覚^さめた。

冷房^{れいぼう}が切^きれて寝汗^{ねあせ}をかいたので、水^{みず}を飲^のもうと2段^{だん}ベッドのはしごとおりる。

そこで、下^{した}で眠^ねっているはずの兄^{あに}がいないことに気^きづいた。

「あれ？」

兄^{あに}も寝苦^{ねぐる}しくて起^おきてしまったのだろうかと思^{おも}いながら部屋^{へや}を出^でる。

家^{いえ}のなかは真^まつ暗^{くら}だった。

兄^{あに}がいるなら明^あかりをつけるはずだ。ベランダで涼^{すず}んでいるのかもしれない。

などと思^{おも}つて、リビングの照^{しょう}明^{めい}スイッチに手^てをのばした瞬間^{しゅんかん}、ダイチはぞくりとし

た。

声^{こえ}が、したのだ。かすかだけれど、ぼそぼそと、兄^{あに}の声^{こえ}が。

「……つか……よな。きみも……おれ……るから……。」

電話^{でんわ}で話^{はな}している？



……そうじゃない。兄あにへの返事へんじも聞きこえてきた。

『……だね。……ぼくも……るよ。』

明あかりもつけずに、兄あには人形にんぎょうと話はなをしていた。

あまりに熱心ねっしんに話はなしこんでいるせいで、ダイチには気きづいていないようだった。
気味きみがわるい、と思おもってしまった。

いくらなんでも、これはおかしくないだろうか？

兄あにはどうしてしまったのだろうか？

○ ○

つぎの日ひ、兄あには学校がっこうを休やすんだ。

というか、ベッドから出でてこようとしなかった。

朝あさごはんも食たべずに、タオルケットにくるまって、人形にんぎょうとこそこそしゃべるだけ。



母は心配していただけれど、仕事を休むわけにもいかず、家を出ていった。ダイチも、「じゃあ、おれも行くから。」と声をかけて、学校へむかった。でも、授業を受けているあいだも、兄のことが気がかりで集中できなかった。なにかが変だ。

ダイチの知っているテンヤとは別人のようだった。

どうしてそうなつてしまったのか？

考えられるのは、あの腹話術人形だった。

それ以外にありえない。

あの人形を手に入れてから、兄は変わってしまった。

あの人形はなんなのだろう？

ガチャが願いをかなえてくれたみたいに言っていたけれど、わけがわからない。

……本当に、兄がしゃべっているのだろうか？

ひょつとして、人形そのものが自らの意思で話しているのではないだろうか？

その思いつきに、ゾツとする。

ふつうならありえないことだけど……。

学校から帰ると、兄はやはり人形をかかえて、何事かをぼそぼそしゃべっていた。

ダイチが声をかけても、もう返事をしてくれなかった。

母が帰ってからそれは同じで、夕食もいつしよにとらなかった。

小さくエアコンの室外機の音がする。

2段ベッドの下から、テンヤの寝息が聞こえていた。

ダイチは体を起こして、首をのぼし、兄の様子を確認する。

部屋の中は暗いけど、なにも見えないほどではない。

兄が人形を抱いて眠っているのがわかった。

ダイチはそつとはしごに足をかけ、音をさせないように下におりていく。



それから、人形の腕に手をかけた。

「んん。」

兄が寝がえりをうち、ダイチはびっくりとして手を離れた。

そのまましばらく、じつとする。

冷房はついているのに、ひたいを汗が伝った。

兄に起きる気配はない。

ほっと息をついて、ダイチは再度、人形をつかんだ。

ゆっくり、確実に、兄を起こさないように、人形をその腕からひきぬく。

兄はまだ寝ている。

「よし。」

ダイチは家のカギをポケットに入れ、人形をわきにかかえたまま、素早く部屋を出た。

この人形は処分しようと思っていた。

ゴミ袋ぶくろに入れてマンションの燃えるゴミ置き場おきばに持つていけば、回収かいしゅうしてくれるだろう。

サンダルをひっかけて玄関げんかんドアから共用廊下きょうようろうかへ出る。

空気くうきは生ぬるく、手てすりから見みあげる空そらは深い紺色こんいろだった。

しずかだ。

胸むねがドキドキしていた。

あしたの朝あさ、目めを覚さました兄あには人形にんぎょうが消きえていることに気づきいて、怒おこるかもしれない。でも、これは必要ひつようなことだ。

「この人形にんぎょうさえなくなれば、もとの兄ちゃんにもどつてくれる。」

エレベーターの前まえに到着とうちゃくして、ボタンに手てをのばす。

その瞬間しゆんかん――。

ガンッ！

ダイチはエレベーターのドアに体からだをうちつけていた。



「——っ！」

とつぜんのことにびっくりして、ふりかえろうとしたけれど、それはかなわなかった。

「おい！ てめえ！ なにしてやがる！」

耳^{みみ}もとで大声^{おおこえ}がして、身^みがすくんだ。

信じ^{しん}られないけれど、それはテンヤの声^{こえ}だった。

「おれの親友^{しんゆう}を盗^{ぬす}んで！ どういうつもりだ！」

髪^{かみ}をわしづかみにされ、顔^{かお}をドアに押^おしつけられる。

ものすごい力^{ちから}で逃^にげられない。

「い、痛い^{いた}、に……兄^{にい}ちゃん。」

「どういうつもりだつて聞いてんだよ！ ああ？」

痛み^{いた}と恐怖^{きょうふ}で涙^{なみだ}がにじんだ。

なんだこれは。なにが起^おこつてる。理^り解^{かい}できない。

兄が、尊敬する兄が、こんなふうになるなんて信じられない。

「た、助けっ——。」

そのとき、とうとう兄の手がゆるんだ。

と思った直後に、どきりと音がする。

「え？」

「ケガはないか？」

新たな声がして、今度こそダイチはふりかえった。

兄と同じ年くらいのピンク髪の人物が立っていた。

女子にも見えるし、男子にも見える。

白いブレザー姿だった。このあたりの学校の制服ではなさそうだ。

その足もとに兄が倒れている。

眠るときのTシャツに短パン姿で、はだしだった。

「に、兄ちゃん……？」



「氣絶きぜつしているだけだ。心配しんぱいいらない。」

しゃがんでたしかめると、ちゃんと息いきをしていたので、ダイチはほつとした。

「あ、あなたが、助けてくれたんですよね？ あ、あ、ありがとうございます。」

「いや、これも仕事しごとのうちだ。」

「……仕事しごと？」

「ぼくの名前なまえはクオリア。SCP財団エスシーピーざいだんのエージェントだ。」

「えすしーピー……。」

人形にんぎょうが話はなしていた、願ねがいかなえるガチャの名前なまえと同じだ。

「この世界せかいには、常識じょうしきでは説明せつめいできない物ものや現象げんしやうが存在そんざいする。そうした異常存在いじやうそんざいを確かく

保ほ(Secure)、收容しゆうよう(Contain)、保護ほご(Protect)すること、

一般人いっぱんじんを守るまもることがSCP財団エスシーピーざいだんの役目やくめだ。最近さいきん、SCPガチャエスシーピーに遭遇そうぐうしたな？」

「は、はい。兄にいちゃんが……。」

ダイチは氣絶きぜつしている兄あにに目めをやる。



「なんか、よくわからないけど、願ねがいをかなえてくれるガチャとかつて。」

「あれは、甘あまい言ことば葉はでひとびとをまどわし、ガチャをまわさせることで、財ざい団だんが確かく認にんしている異い常じょう存そん在ざいをコピいーしてざいいる。しかし、本ほん当とうに希き望ぼうしたとおりに願ねがいがかなうとはかぎらない。」

「兄にいちゃんは、本ほん音ねを話はなせる友ともだちがほしいって……。」

「その袋ふくろに入はいっているものは？」

「腹ふく話わ術じゆつの人にん形ぎやうです。兄にいちゃん、まるでこの人にん形ぎやうにとりつかれてるみたいで、さつき

もおれが捨すてに行いこうとしたら、追おいかけてきて……。」

これまで兄あにに暴ぼう力りよくをふるわれたことなんてなかった。

おもだい思おもい出だすだけで、体からだがふるえる。

「なるほど。それはSCP-174、『腹ふく話わ術じゆつ人にん形ぎやう』だな。所しよ有ゆう者しやの精せい神しんにアクセス

して、あやつろうとするタチのわるい人にん形ぎやうだ。」

「人にん形ぎやうのほうが、人にん間げんをあやつる？」



「そのように考え^{かんが}られている。だが、安心^{あんしん}していい。そいつはコピーだから、それほど対処^{たいしよ}には困^{こま}らない。」

ダイチの手^てからゴミ袋^{ぶろ}を受け^うけると、クオリアはそれを壁^{かべ}にたたきつけた。

びつくりしてダイチは目^めを見開^{みひら}く。

呪^{のろ}われた人形^{にんぎよう}にそんなことをしてだいじょうぶなのかと、ゴミに出^だそうとしていた

こと^{わす}も忘れて心配^{しんぱい}になつてしまう。

クオリアはゴミ袋^{ぶろ}の口^{くち}をほどいて、なかに手^てを入^いれた。

「これが、もとの姿^{すがた}だ。」

出^でてきたものは、あの腹話術^{ふくわじゆつ}人形^{にんぎよう}を手^てのひらサイズに縮小^{しゆくしやう}したようなフィギュア

だった。

「こいつは回収^{かいしゆう}させてもらう。」

クオリアはブレザーのポケットにフィギュアをおさめた。

それから、まっすぐにダイチを見^みる。

「ぼくとかかわった人間からは、その記憶を消さなくてはいけない。」

「記憶……。」

「きみのお兄さんには、すでに一連のことは忘れさせた。目覚めてから腹話術人形についてたずねても、なにも覚えていないだろう。」

「お、おれの記憶も消すんですか？」

クオリアは少し長めにまぶたを閉じ、ひらいた。

「そのつもりだったが、きみはどうしたい？ 兄におそわれたことを忘れることもで

きるし、兄のために行動した自分の勇気を覚えておくこともできる。その気持ちは、将来、きみの役に立つかもしれない。」

「記憶を消さないでいてくれるんですか？」

「だれにも、このことを話さないと誓えるのなら。」

どうする？ と、クオリアは言った。

選択をゆだねられたダイチは――。



朝、目を覚ましてすぐ、ダイチは2段ベッドの下を確認した。
兄の姿はなかった。

はしごをおりて、リビングへむかう。

そこには――。

「おはよう、ダイチ。早いな。」

制服姿の兄がいた。

「お、おはよう、兄ちゃん。……きょうは、学校行くの？」

「もちろん。なんで？」

兄はふしぎそうに首をかしげる。

「あ、いや……。あのさ、兄ちゃん。」

「ん？」

ダイチは「ぐん」とつばをのみこんだ。そして兄あにの目を見みながらたずねる。

「腹話術人形ふくわじゅつにんぎょう、どうしたの？」

「腹話術人形ふくわじゅつにんぎょう？ なんのことだ？」

テンヤはますます首くびをかしげる。

クオリアの言いうとおりだった。本当ほんとうに記憶きおくがなくなっている。

覚おぼえているのは、ダイチだけ。

「う、ううん。なんでもない。」

ダイチは首くびを左右さゆうに大きくふった。

「なんだよ、変へんなやつだな。」

そう言いって洗面所せんめんじょへむかおうとした兄あにを、ダイチは「兄にいちゃん。」と呼よびとめる。

「うん？」

ダイチはこぶしをにぎりしめた。



「あのさ、おれ、もつとちゃんとするから。兄ちゃんが無理むりしないでいいように。だから、いろいろためこまないで、おれのこともとたよつてよ。本音ほんねもバンバン話はなしてくれていいから！」

本音ほんねを話はなせる友だちにはなれなくても、本音ほんねを話はなせるきようだいにはなれる。

そうなりたいたとダイチは思おもった。

とつぜんのダイチの言葉ことばに、テンやはまぶたをしぱしぱと開閉かいへいする。

それから、ニツと笑えみを深めふかめた。

「わかった。たよりにしてる。」

SCPガチャ図鑑

ふく わ じゅつ にん ぎょう
腹話術人形



オブジェクト
クラス
Euclid
ユークリッド

ばんごう
アイテム番号
SCP-174

とくべつしりょう
特別收容プロトコル (Special Containment Procedures)

サイト-19の保管ユニット-07に收容されている。常時、監視カメラで見張り、GPS追跡装置をとりつけておかなければならない。

せつめい
説明

木製の腹話術人形。全長53センチメートル、衣装はボロボロで、かなりの年代物と思われる。SCP-174を手にした者は、未経験者であっても完璧に腹話術をおこなうことができる。一方、まるでそれが生きているかのように思いこみ、異様な執着を見せるようになる。